

超 音 波 検 診

腹部超音波検査は、腹部の肝臓、胆嚢、腎臓、膵臓、脾臓における疾病の早期発見に役立つばかりでなく、これらの臓器以外にも、大動脈、膀胱などの臓器を観察することができ、多様な所見内容で疾患を発見できる検査である。

超音波の反射波を画像にする本検査は、レントゲン検査のような放射線被曝の心配や、検査に伴う苦痛もなく、安全かつ有用な検査として定着しつつあり近年、生活習慣病予防健診の付加項目として受診するケースも多く見られるようになった。

産業保健分野における受診者数は、表1に示したとおりである。平成16年度は受診者数において前年度比1,434名増の9,054名となった。

受託団体はその殆んどが毎年の依頼であるが、検査の必要性が理解され新規受託も順調に推移し、4年連続しての受診者数の増加となった。

当協会では熟練した専門医の知識と経験をもとに生活習慣病予防健診などとの併用や有所見者の精密検査の実施と、治療の出来る医療機関との連携によるフォローアップを行っている。

結果、考察

平成16年度は過去3年同様に男女とも受診者数が増加した(表1)。判定内容の内訳(表2)を見ると要医療となる要精密検査、要受診、主治医継続群は全体で7.3%と昨年より低くそれ以外の何らかの所見を有する群は全体の63.3%であり、やはり昨年度よりも低値の6割強であった。いままでより、若年層の受診者も多く超音波検診の意義が一段と認識されより幅広い検診受診者層となった。

臓器別所見内訳(表3)を見ると、胆嚢ポリープ、脂肪肝、大動脈石灰化といった生活習慣病に関連する所見は相変わらず多く、肝嚢胞、腎嚢胞といった病的意義の明らかでない所見も多く認められた。さらに悪性腫瘍との鑑別が必要な胆嚢腺筋腫症(35例)、肝腫瘍(19例)、腎腫瘍(4例)、膵腫瘍(1例)膵嚢胞(17例)、膵管拡張(49例)症例などの拾い上げ、悪性腫瘍ではないものの場合によっては治療が必要となる胆石、萎縮胆嚢、胆道気腫、水腎症、大動脈瘤といった症例も昨年同様拾い上げた。昨年に比し若干頻度が低下しているが、これは母集団の変化が関与している可能性が示唆される。

これらの<生活習慣病関連の画像診断>、<悪性腫瘍との鑑別を含む要精査群>、<悪性腫瘍以外の要精査群>などの検診処理は実際一次的に単純な処理は困難であるが常により適切な検診対応を追い

求め、各事業所の実情に最も適した対処を模索し現在試行錯誤している。

腹部超音波検査の有用性は一般的に認知され現時点の厳しい社会情勢においても年々着実に受診者数の増加をみている。当施設における精度管理の評価も定まってきていると思われる一面がある一方、その対象臓器の多さと所見の多彩な面に置いて産業保健分野においては拾い出し後の判定処理に苦慮している現状がある。今後は各事業所における医療管理者側の対応に関して存在する温度差を考慮しながらより一層有意義な超音波検診を追及する所存である。

方 法

腹部超音波検査は可聴域外の音波(3~4MHz)を対外より体内に発射しその反射を画像化することにより得られる情報で診断する装置である。この検査は腹部の実質臓器(肝臓、膵臓、脾臓、腎臓)、胆嚢、腹部大動脈、さらにはリンパ節、膀胱、前立腺、腸管等腹腔内の様々な臓器の状態を把握すること可能である。検診では実質臓器と胆嚢及び腹部大動脈を検査の対象としている。

A. 検査前の注意

- ①前夜9時以降の飲食をせずに午前中に検査する。
- ②午後に検査を行う場合には胆嚢が収縮することを考慮して牛乳、卵、油ものを避けて通常の半量の朝食を摂ってもらい検査まで6時間の絶食とする。
- ③消化管のバリウム検査は数日前から実施しない。
- ④胃X線や内視鏡を同日に試行する場合には臓器の抽出状態を考えて超音波検査を先に行う。

当施設では検査に先立って下剤等の薬物投与ならびに浣腸等の前処置は行っていない。

B. 検査の実際

- ①受診者は背臥位で腹部を露出し、検査者は受診者の右側の装置に向かって座る。
- ②腹部全体にゲルを広く塗布し、探触子を受診者の皮膚に密着させ腹部の臓器を観察しながら記録する。

C. 判定

技師により画像をすばやく適切に判断すると同時にフィルムを撮影し専門医とディカッションしながらダブルチェックで最終判定を下している。尚判定に際しては、前回受診歴を確認し前回所見並びに精検所見などを考慮して判定を下している。

関係の集計表は75頁に掲載